



文部科学省私立大学
戦略的研究基盤形成
支援事業採択

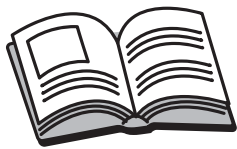
秋が深まって参りました。

K I H Sでは昨年度、第三期の活動の成果報告として
二冊の叢書を刊行いたしました。

このニュースレターではそのうち一冊を紹介しております。
ぜひお手にとってご覧下さい。

ご意見・ご批判を賜ることができましたら幸いです。





第二次世界大戦が終結して七〇年近くになる。そこに吹き荒れた暴力はその後の世界に、物的・人的な被害ばかりでなく、トラウマという形で人々の心に深い傷跡を残した。その意味では戦争は終わらない。その後も新たな戦争、地域紛争、テロリズム、差別は絶えることなく、被害を生みだし続けている。そして関東大震災、幾多の犠牲者、幾多の恐怖、幾多の苦悩、見えない未来。こうしたコンテクストを踏まえて、甲南大学人間科学研究所の主な研究員である臨床心理学および哲学・芸術学・文学のスタッフを始めとして、研究員として共同研究に参加して下さっている本学内外の研究者の方々、博士研究員、博士課程のリサーチ・アシスタント、研究会とシンポジウムに参加して下さっている学部・大学院生、そして地域市民の方々とが四年間に渡って培ってきた研究活動を基に編纂した本書は、子ども時代の戦争体験に注目した調査研究をメインに、次の四部構成からなる。

第一部「子どもの時代の戦争体験の記録と理解」には、関西地区を対象に、心理学および歴史学という二つのアプローチから行なった戦争体験の聴き取り調査をもとにした報告と考察、「関西地域における「戦争の子ども」(藤原雪絵)と「疎開体験の調査—精道国民学校の場合」(東谷智)を収め、その間に、口述証言をテーマに二つのアプローチの関係を方法的に考察する「戦争の子ども」における心理学的研究と歴史学的研究の相補性(人見佐知子)が介在する。「序論—「戦争の子ども」研究の意義」(森茂起)は、第一部の序説であるとともに、全巻の序説でもある。

第二部「戦争を生きた子どもたち」は、ミュンヘン大学のM.エルマン氏を招いて本学で開催したシンポジウムの記録である。第二次世界大戦における「加害者」として自らを位置づけてきたために埋もれてきたドイツ市民の被害者性を掘り起こした調査研究についての氏の発表、東京都墨田区立すみだ郷土文化資料館で、描画によって空襲体験者の「語りえない記憶」を蒐集し展示してきた経験の報告「語りうる戦争体験、語りえない戦争体験」(田中禎昭)、NHKで戦争体験の継承を模索しつつ番組「祖父の戦場を知る」に携わった経過の発表「戦争を生きている子どもたち—祖父の戦場」(大森淳郎)は、大学における学術研究とは異なる場での実践報告であり、討論会の記録がそれに続いている。

第三部「〈加害-被害〉関係と和解、そして赦し」は、暫定的総合である「戦争体験にみる「加害」と「被害」(森・人見・エルマン)と、和解と赦しの関係の哲学的考察「喪、赦し、祈り」(港道隆)からなる。

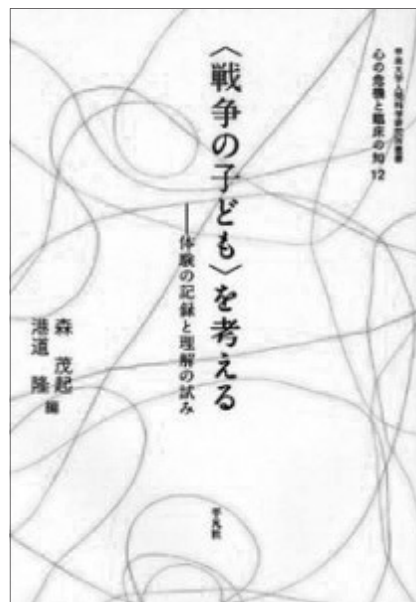
研究は現在も進行中であるが、第二次世界大戦をこれまでにないパースペクティブから問い直した本書は、その結節点一つとして極めて独自の成果になったのではないかと自負している。四年間、テーマを設定し、それをめぐって実に多様な研究なパースペクティブが交錯し、学問分野を超えた議論を蓄積できたことがこの共同研究の実りである。本書に寄与しながら執筆者とならなかった数多くの方々の発言と考察とが反響しているならば、それにまさる喜びはない。この試みに参加して下さったすべての方々へ感謝している。

(港道隆)

(本書は、文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の助成を受けて甲南大学人間科学研究所が2008年から続けてきた研究成果の一つである。)

甲南大学人間科学研究所叢書
〈心の危機と臨床の知〉12

「戦争の子ども」を考える— 体験の記録と理解の試み」



◎目次

はじめに 森 茂起／港道 隆

第1部 子ども時代の戦争体験の記録と理解

序論—「戦争の子ども」研究の意義 森 茂起
 関西地域における「戦争の子ども」 藤原雪絵
 「戦争の子ども」における心理学的研究と歴史学的研究の相補性
 人見佐知子
 疎開体験の調査—精道国民学校の場合 東谷 智

第2部 「戦争を生きた子どもたち」—シンポジウム記録より

シンポジウム趣旨 森 茂起
 戦争の子ども時代を思い出すドイツ人 ミヒャエル・エルマン
 日本における子どもの戦争体験—関西地域における調査から
 森 茂起
 語りうる戦争体験、語りえない戦争体験 田中禎昭
 戦争を生きている子どもたち—祖父の戦場 大森淳郎
 全体討論 森 茂起／ミヒャエル・エルマン／田中禎昭／大森淳郎

第3部 〈加害—被害〉関係と和解、そして赦し

戦争体験にみる「被害」と「加害」 森 茂起／人見佐知子／ミヒャエル・エルマン
 喪、赦し、祈り—数ある例のひとつではない 港道 隆

あとがき 港道 隆

執筆者略歴

平凡社 (2012年3月)／A5判上製329頁／2,940円(税込)
 ISBN-10: 4582731066
 ISBN-13: 978-4-58-273106-4



活動報告

プロジェクト 2. 育てる関係の危機と子育て意識の多相性についての研究

「育て! パパごころ～父親になる人、父親を応援するためのガイド」完成!



父親になる人、父親になった人、父親を応援する人のためのパンフレット、『育て! パパごころ』が完成しました。このパンフレットは、甲南大学人間科学研究所子育て研究会(以下、子育て研究会)が、2009年から行ってきた父親の子育て意識についての研究から得られた知見を、広く一般に還元しようという試みの一つとして作成されたものです。

子育て研究会による研究の着手に遅れること約1年、2010年6月、厚生労働省によって「イクメンプロジェクト」が開始され、同年末には「イクメン」が新語・流行語大賞のトップテンに入り、男性が積極的に育児を楽しむ様子が世間に広く知られることになりました。以降、いろいろなところで「イクメンコンテスト」や「イクメン大賞」などが催され、それなりに話題を呼んでいます。ところが、男性の育児休業取得率は2011年度に過去最高を記録したものの2.6%にとどまり、2017年度までに10%という内閣府の目標には程遠いものにすぎません。言葉は踊っていても、実質が伴っていないといえるでしょう。

一方で、さまざまな学問分野で父親についての研究が積み重ねられてきています。しかし、母親のそれに比べて少ない印象は否めません。また、父親についての研究を眺めてみると、父親のあり方が子どもの発達にどのような影響を及ぼすかというような視点からのものも多く、当の父親の気持ちや思いに焦点を当てたもの、父親の声の聞こえてきそうなものはあまり見当たりません。

子育て研究会の調査では、32.8%の父親がほかの父親がどんな子育てをしているのか気になっており、26.7%の父親が子育てについて知人と話したいと思っているができていないことが明らかになりました。また、50.0%の父親は子育てについて知人と話をする機会がほとんどないという結果も出ました。ここから、大まかに3割程度の父親は、ほかの父親がどのように子育てをしているのか気になりながらも、知ることができずにいる姿が浮かび上がります(『(第2回)子育て環境と子どもに対する意識調査-父親版-』報告書)より)。

このような中、子育て研究会では、父親が子育てにおいてどのようなことを感じているのかという調査を、インタビューと質問紙を通じて行いました。また、調査の結果を元に、子育て中の父親を支援する試みもはじめました。今回のパンフレットはこれらの調査と活動の中から明らかになった父親の声を元に作られました。

子育ては楽しいか、どんなふうに父親の気持ちになるのか、どんな父親になりたいのか、仕事・家族とのつき合い方についてどのように考えればよいのか、父親の感じている迷いはどのようなものかについて、父親の声を紹介し、子育てについて語ってみることを提案しています。パンフレットを読むことで、現在の父親の多くは子育てを楽しんでいる一方、さまざまな悩みや迷いも抱えていることがわかれると思います。このことは、父親とともに子育てをしている母親や、子育て中の家族を支える方々にとっても、父親の気持ちを理解する一助となるでしょう。

パンフレットは、甲南大学人間科学研究所のホームページ上でも公開されています(<http://kihs-konan-univ.org/categories/952>)。一度、お目通しいただけると幸いです。また、同研究所に申し込むことでお一人様1部に限り頒布もしています(数には限りがあります。1部以上をご希望の方はご相談ください)。返信用封筒(角3サイズ)と140円分の切手を同封し、〒658-8501神戸市東灘区岡本8-9-1、甲南大学人間科学研究所(078-435-2683)までお願いいたします。また、『(第2回)子育て環境と子どもに対する意識調査-父親版-』報告書』(<http://kihs-konan-univ.org/categories/82>)もご参照いただければ幸いです。

(文責:新道賢一)

これまでの活動

出版事業

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知12
『(戦争の子ども)を考える——体験の記録と理解の試み』

編者: 森 茂起(甲南大学/臨床心理学)
港道 隆(甲南大学/哲学)
執筆: 森 茂起(甲南大学/臨床心理学)
藤原 雪絵(甲南大学人間科学研究所/臨床心理学)
人見 佐知子(甲南大学人間科学研究所/歴史学)
東谷 智(甲南大学/歴史学)
ミハエル・エルマン(ミュンヘン大学/精神分析)
田中 禎昭(すみだ郷土文化資料館/歴史学)
大森 淳郎(NHKディレクター)
港道 隆(甲南大学/哲学)

平凡社 (2012年3月)/A5判上製329頁/2,940円(税込)
ISBN-10: 4582731066
ISBN-13: 978-4-58-273106-4

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知13
『子別れのための子育て』

編者: 高石 恭子(甲南大学/臨床心理学)
執筆: 高石 恭子(甲南大学/臨床心理学)
根ヶ山 光一(早稲田大学/発達行動学)
北川 恵(甲南大学/臨床心理学)
新道 賢一(甲南大学カウンセリングルーム/臨床心理学)
濱田 智崇(京都橘大学/臨床心理学)
川口 彰範(YMCA学院高等学校/臨床心理学)
中里 英樹(甲南大学/社会学)
西 欣也(甲南大学/芸術学)
安住 伸子(神戸女学院大学カウンセリングルーム/臨床心理学)
穂苅 千恵(山王教育研究所/臨床心理学)
藤原 雪絵(甲南大学人間科学研究所/臨床心理学)

平凡社 (2012年3月)/A5判上製275頁/2,940円(税込)
ISBN-10: 4582731074
ISBN-13: 978-4-58-273107-1

これからの活動

公開シンポジウム

『自伝的記憶と心理療法
—記憶に触れることの困難と意義—』

開催日: 2012年12月23日(日) 14:00~15:45
場所: 甲南大学18号館3階 講演室
総合司会: 富樫公一
シンポジスト: 森 茂起 「トラウマの記憶に触れることの治療的意義」
北川 恵 「アタッチメント臨床における記憶の扱い」
福井 義一 「記憶に触れることは援助的か
—身体志向心理療法の立場から」
指定討論者: 西 欣也

公開研究会

プロジェクト1. 加害—被害関係の多角的研究—和解と救済—
第72回公開研究会
『ハンセン病問題にみる(加害—被害)関係から』

開催日: 2012年12月21日(金) 16:30~18:30
場所: 甲南大学18号館3階 講演室
講師: 蘭 由岐子(追手門学院大学/社会学)
企画: 港道 隆(甲南大学文学部/哲学)

出版事業

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知14
『美と病とトポロジー(仮)』

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知15
『自伝的記憶と心理療法(仮)』

2013年2月末刊行予定

発行年月日: 2012年11月16日

編集後記

「圧倒的な人柄のよさ」をM先生に賞賛された若手PDが結婚しました!
結婚式には研究所のメンバーがそろって駆けつけました。さわやかな二人の門出をお祝
いたします。

KIHSの運営も祝福されたものとなりますように(笑)。

